

# 筑波大学中央図書館ラーニング・コモンズにおける 大学院共通科目「ザ・プレゼンテーション」の実施

## An Implementation of Graduate General Education Course "The Presentation" in University of Tsukuba Central Library Learning Commons

松原 悠<sup>1</sup>, 斎藤 未夏<sup>2</sup>, 石津 朋之<sup>3</sup>, 大山 貴稔<sup>4</sup>  
佐藤 まみ子<sup>5</sup>, 新村 麻実<sup>6</sup>, 野村 港二<sup>7</sup>

Yu MATSUBARA<sup>1</sup>, Mika SAITO<sup>2</sup>, Tomoyuki ISHIZU<sup>3</sup>, Takatoshi OYAMA<sup>4</sup>  
Mamiko SATO<sup>5</sup>, Mami SHIMMURA<sup>6</sup>, Koji NOMURA<sup>7</sup>

抄録：筑波大学中央図書館のラーニング・コモンズ「ラーニング・スクエア」では、2015年10～12月、オープンなスペースである「グループ学習スペース」において、大学院生対象の授業科目「ザ・プレゼンテーション」を10回にわたり実施した。講師と受講者を対象に調査したところ、ラーニング・スクエアは、開放的で立ち寄りやすいという点が評価されている一方で、周囲の目や音が気になるため授業への集中が妨げられるという側面もあり、活発な議論や発表の場として活用するには課題が存在することが明らかとなった。

キーワード：筑波大学附属図書館、ラーニング・コモンズ、学習支援、開かれた空間、大学図書館

### 1. はじめに

筑波大学附属図書館では、「インプットからアウトプットまでの知的創造活動と、交流・協働のトータルサポート」<sup>1)</sup>をコンセプトに、「学生たちが気軽に集い、学び、教え合う学びの空間」「多様な学習スタイルに応じて姿を変える万華鏡空間」「学生同士の交流や諸活動の『見える化』により知的好奇心を刺激して、学びの相乗効果を生み出す空間」を目的として、2011年9月、中央図書館本館にラーニング・コモンズ「ラーニング・スクエア」を開設した。

ラーニング・スクエアでは、学生団体によるポスター展示や、教員と協働したセミナー等のイベントが、年間を通じて開催されている。また、大学院生の「ラーニング・アドバイザー」<sup>2)</sup> (以下、LA) によるライティング支援等の人的支援サービスを提供するとともに、グループで利用しやすい環境を整えている。

グループで利用できる場としては、ガラス等で仕切られた「セミナー室」および「コミュニケーションルーム」、そして、レファレンスデスクと新着の雑誌を並べた書架の間の、仕切りがなく開放的な「グループ学習スペース」がある。「グループ学習スペース」には、可動式テーブルや椅子、ホワイトボード、プロジェクト等があり、これらを移動すれば参加者50名程度のセミナーも開催可能である。これまで、

セミナーの多くが、コミュニケーションルーム等の仕切られた空間を会場として開催されてきた。しかし2014年度以降、開かれた空間でのセミナーの開催が試みられ始め、2015年には、大学院生対象の授業科目「ザ・プレゼンテーション」の「グループ学習スペース」での実施が実現した。

本稿は、「ザ・プレゼンテーション」の実施を通じて、附属図書館での授業科目実施における課題を明らかにすることを目的とする。その視点は、附属図書館はどのようにして担当教員をはじめとする授業関係者との協働に至ることができるのか、およびラーニング・コモンズにおける開かれた空間が授業実施場所としてどのように評価されたのか、である。はじめに、ラーニング・コモンズにおける教員等との連携と、本授業が実施された経緯を述べる。その上で、受講者および担当教員に対して実施したアンケートの結果を整理する。

### 2. ラーニング・コモンズにおける学内連携

#### 2.1 連携の必要性

ラーニング・コモンズはしばしば、インフォメーション・コモンズとの対比によって説明される。Beagle<sup>3)</sup>は、インフォメーション・コモンズを「学習支援のために組織化された物理的、電子的、人的、社会的資源を関連付けた、ネットワーク利用のため

のアクセスポイントと、関連する情報通信技術のツールの集合体」と定義した。そして、インフォメーション・コモنزの資源が、「他のアカデミック部門によって提供される学習支援構想と共同で組織され、協調的プロセスを通じて明確にされた学習のアウトカムに結びついた」ときに、ラーニング・コモنزに発展するとしている。

Bailey と Tierney<sup>4)</sup>は、インフォメーション・コモنزを「電子情報資源、マルチメディア、印刷資源並びに各種のサービスへの統合的なアクセスを学生に提供するという、情報サービスの一つのモデル」と定義し、「ラーニング・コモنزはインフォメーション・コモنزのすべての特徴を含むとともに、さらにそれらを拡張し、増進している」と述べている。また、ラーニング・コモنزは、「図書館中心ではなく、図書館の中に多くの、以前は外部のものであった機能や活動を取り込み、それらが以前展開されていたところにもその活動の効果をいきわたるようにする」ものであると説明している。

これらの定義から、ラーニング・コモنزの運営には、附属図書館と学内の教員や他部署等との連携・協働が不可欠であることが示唆される。呑海と溝上<sup>5)</sup>が述べているように、ラーニング・コモنزは「単なる大学図書館内のムーブメントの一つではなく、大学のミッションや事業計画に密接に結びついた協働的・持続的な運営がなされるもの」であり、「大学図書館という建物や組織の枠を超えた存在である」必要がある。

## 2.2 連携の事例

大学図書館と学内教員等との連携の必要性は、ラーニング・コモنزの出現以前から指摘されており、様々な形で実現が図られてきた。それらの取り組みの多くは、学生の図書館利用の促進を目的とした情報リテラシー教育の一環として行なわれたものである<sup>6)</sup>。

東北大学では、大学図書館と教員との連携をラーニング・コモنزによって発展させた。東北大学附属図書館では、2004年度から全学教育科目の授業を教員と共同で開講してきた<sup>7)</sup>。2012年に図書館内に設置されたラーニング・コモنزを活用し、2013年度からはアクティブ・ラーニングの手法を採用した全学教育科目「図書館を活用したスタディスキル」が図書館内で開講された。米澤<sup>8)</sup>は、授業を図書館内のラーニング・コモنزで行うことで、「単なるアクティブ・ラーニングではなく、図書館資料を活用したアクティブ・ラーニングの手法を教授することにより、学生の学びが高度化する」として、教育

的效果の向上が図れることを指摘している。

ここで報告する「ザ・プレゼンテーション」は、「受講者それぞれの研究や学問分野の意義を、異分野・一般の人に対して解り易く魅力的に伝える、研究プレゼンテーション能力を身につける」ことを目的としている。したがって、中央図書館ラーニング・スクエアで実施されてはいるが、その内容は、図書館の利用に直接的に結びつくものではない。本稿は、大学図書館内のラーニング・スクエアを主な場所とした、一見図書館の利用法とは関係のない内容の科目について、附属図書館が科目と協働する形で実施した事例を報告する。さらに、ラーニング・スクエアが、授業を実施する場所としてどのような性質をもつのか、およびラーニング・スクエアで実施された授業の内容が、科目として問題なく成立したかについて考察を進める。

## 3. 実施の経緯

### 3.1 筑波大学中央図書館ラーニング・コモنز「ラーニング・スクエア」

#### 3.1.1 概要

ラーニング・スクエアの目的は、学びの相乗効果を生み出す空間の実現である。そのために、人的支援サービスを中核に据える一方、グループ学習環境や成果発表・企画のスペースを設置している<sup>9)</sup>。

人的支援サービスは、LA、レファレンスデスクやメインカウンターの図書館職員、ボランティアカウンターでの市民による図書館ボランティアから構成される。

ラーニング・スクエアのスペースは、これら人的

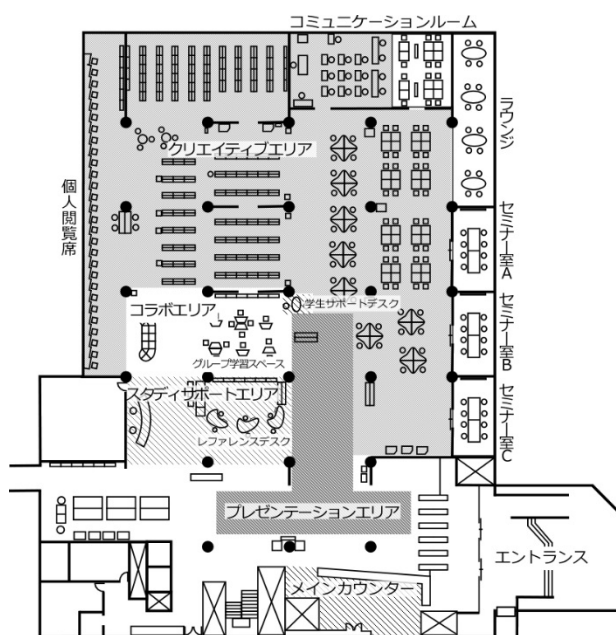


図1 ラーニング・スクエアの配置

支援サービスを配した「スタディサポートエリア」のほか、「クリエイティブエリア」、「コラボエリア」、「プレゼンテーションエリア」の4つのエリアから構成されている(図1)。各エリアでは、年間を通して様々な活動が開催されている(表1)。

### 3.1.2 活動

「プレゼンテーションエリア」での展示は徐々に学内でも認知され、学内部署・学生団体との共催、主催等の場としても活用されている。様々な形態で2001年10月から2016年2月の間に50回以上の展示が開催されている。ラーニング・スクエアのテーマ「学生同士の交流や諸活動の『見える化』」は展示にも反映されている。たとえば、国際書道クラブとの共催による来場者参加型展示である企画展「書Book+Calligraphy Exhibition 2014」は、学生にとって展示が発表、協働、交流の場であると同時に、参加者によって展示が変化し完成するという双方向性を持っている<sup>10)</sup>。

「クリエイティブエリア」ではパソコン、プレゼンテーション、レポート作成等のスキルアップの参考図書を揃えた「アカデミック・スキルズ図書」コーナー、教員によって指定された必読図書を集中配

表1 ラーニング・スクエアにおける活動  
(2014年4月開始分~2016年2月終了分)

日付	タイトル
2014.4.23-5.23	企画展「書Book+Calligraphy Exhibition 2014」
2014.5.26-6.23	企画展「3拠点からグローバル人材を育てる-平成25年度 筑波大学附属学校からの発信-」
2014.6.16-7.2	企画展「あなたからクローバリーゼーしょん!! 6月20日は世界難民の日」
2014.7.24-8.8	企画展「学生選書ツアーに行ってきました!」
2014.9.30-10.31	企画展「『現実食視』世界食料デーイベント2014つくば」
2014.9.30-11.4	企画展「僕らの夏休みProjectの活動内容及び震災について」
2015.3.24-4.24	企画展「東日本大震災から4年-現状とこれから-」
2015.4.27-5.22	企画展「筑波大学附属学校ポスター」
2015.5.19-5.22	企画展「ネパール大地震の今」
2015.5.22-7.上旬	ミニ展示「Stop! 不正行為 あなたは大丈夫?」
2015.6.8-7.3	企画展「UNICO」
2015.6.19-7.上旬	企画展「6月20日は世界難民の日」
2015.7.27-8.27	企画展「東入国管理センターについて」
2015.7.29-8.22	企画展「学生選書ツアー」
2015.9.18-10.4	企画展「フランス紹介資料フェア文庫-新書で読むフランス-」
2015.10.2-11.8	企画展「僕らの夏休みProject 筑波大学支部 展示」
2015.10.5-12.21	大学院共通科目「The Presentation」人に伝わる研究プレゼンテーションを学ぶ。
2015.10.5-12.21	企画展「ザ・プレゼンテーション推薦図書」
2015.11.10-11.19	企画展「MENAweek(中東・北アフリカ週間) 関連図書展示」
2015.12.2	ORIGAMI Workshop
2015.12.18	多読入門セミナー「英語多読の科学・ラクラク学習法のススメ」
2015.12.25-2016.1.31	企画展「『学問本オナーサービス』対象図書」
2016.1.8-1.31	マナーアップキャンペーン「図書館の本はみんなのもの」
2016.1.22	多読入門セミナー「TOEICスコアを上げるための多読」
2016.2.1	多読入門セミナー「多読はじめの一步」
2016.2.2-2.28	企画展「学生選書ツアー」

架した「授業関連必読図書」コーナーが設置されている。この他、教員との協働によって、レポートや論文執筆に必要なスキルを紹介する「ライティング支援連続セミナー」<sup>11)</sup>(図2)等、様々なセミナーも開催されている。

「コラボエリア」は、1.で述べた「セミナー室」、「コミュニケーションルーム」、そして本稿で報告する「ザ・プレゼンテーション」の会場である「グループ学習スペース」(図1中「学生サポートデスク」の左側)を含むエリアである。初めて「グループ学習スペース」で開催したセミナーは、LAが主体的に企画・運営した「LAセミナー」であった。LAセミナーは、文献管理や量的・質的研究の仕方等をテーマとして開催され、平均して1回あたり約60~70名の参加がある(図3)。この他、2015年度には、学内教員や大学院生の協力を得て、英語多読本の利用の促進を目的とした「多読入門セミナー」を開催し、教員、大学院生の経験や知識と学生の関心に関連づけた学習支援を提供できた。

### 3.2 附属図書館と「ザ・プレゼンテーション」との協働の背景

「ザ・プレゼンテーション」とは、受講者それぞれの研究や学問分野の意義を、異分野・一般の人に対して解り易く魅力的に伝える、研究プレゼンテーション能力を身につけることを目的とした大学院共

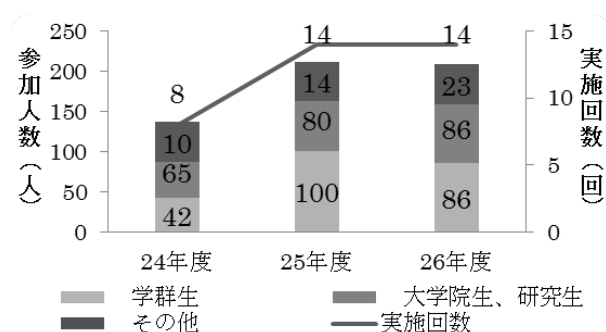


図2 ライティング支援連絡セミナーの実績

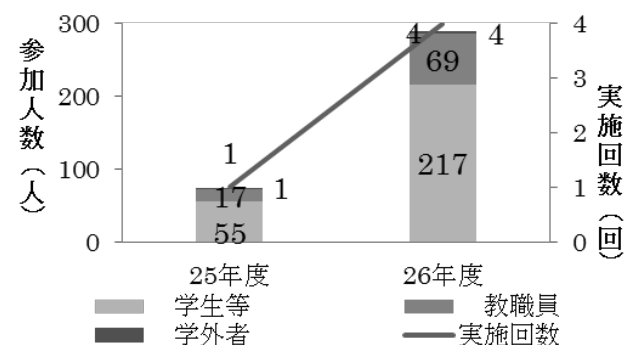


図3 LAセミナーの実績

通科目である<sup>12)</sup>。授業は各回75分間、全10回であり、1回あたり、講義に定評のある本学所属教員がプレゼンターとして毎回1名招かれる。各回の基本的なスタイルは、まずプレゼンターが自身の研究についてプレゼンテーションを行い、続いて研究内容についての質疑応答を行う。共通科目という性格上、多様な研究科、専攻からの受講者がいるが、核心を突く質問も多く、専門を超えた議論という大学院共通科目の目的が達成されている。議論が一段落した後、再びプレゼンターによって、プレゼンテーションについて、どのように準備し、どう臨むか、何に気をつけているか等の講義が行われる。続いて再び質疑応答の時間がとられ、ここではプレゼンテーションについての意見が交換される。このような構成の授業を通して、単にプレゼンテーションの技術を学ぶだけでなく、プレゼンテーションに取り組む考え方や、さらには研究者としての姿勢を学ぶことにこの科目のねらいがある。

本科目は2012年度に、筑波大学の有志学生で構成される、異分野コミュニケーションや科学コミュニケーションの促進を目的とした団体「つくば院生ネットワーク(TGN)」に所属する大学院生による発案、および大学院共通科目委員会とTGNによるデザインを経て、「教員プレゼンバトル」の名称で開設された<sup>13)</sup>。毎年度の科目のデザインについては、担当教員および筑波大学で教壇に立つことのできるティーチング・フェロー(TF)<sup>14)</sup>の資格を持った博士後期課程の大学院生が担当している。授業の設営や司会はTFが、成績評価は担当教員が担当している。本科目のTFには、毎年、TGNのメンバーである学生が含まれている。

「ザ・プレゼンテーション」には、筑波大学内でプレゼンテーションへの関心を高めるといった隠れた目的もある。そのため、受講登録をしていなくても、セミナー感覚で聞きたい話題だけ聞く、あるいは通りがかりに興味を持って試しに立ち寄るといった聞き方を許している。開講年数を重ねるにつれ、立ち寄り聴講者を含めた受講者数から、教室の立地は重要であるという認識が生まれた。すなわち、多くの学生が集まるキャンパス中央の地区で、かつ中の様子がよく見える場所であるほど、受講者が多い傾向があった。

科目運営側がこのような傾向を認識していたことや、科目のTFに附属図書館のLAが含まれていたこと、担当教員にラーニング・スクエアへの理解があったことが重なり、2015年度は、科目側からの提案で、附属図書館と科目とが協働して、中央図書館ラーニング・スクエアにおいて実施することとなった。

これに伴って、科目名を「ザ・プレゼンテーション」と改めた。中央図書館はキャンパスの中心に位置し、中でもラーニング・スクエアは多くの学生が集まる上に気軽に話し合いをしてもよいオープンスペースであり、本科目を実施する場所として適していた。開催の様子を図4に示す。

#### 4. 評価と考察

##### 4.1 受講者による授業会場への評価

###### 4.1.1 調査方法

最終の授業日である2015年12月21日の出席者76名を対象として、授業開始時に、授業資料と同時に調査票を配付し、授業終了後に回収した。回答者は出席者46名であった。内訳は履修者(全員大学院生)が30名、聴講者(非履修者)が16名で、聴講者の内訳は大学院生3名、学群生10名、教職員・研究生・その他が3名であった。

###### 4.1.2 調査結果

第1問「会場の全体的な雰囲気はどうでしたか」(回答数46)については、「とてもよかった」(22%)、「よかった」(59%)が多数を占めた。理由として、「教室以外での授業が新鮮だった」「オープンスペースで絶対に本来なら授業をしない所だから」「フリースペースなのが開放的でよかった」など好意的な意見が挙がった。一方「ふつう」(15%)、「悪かった」(4%)の理由として、周りへの気兼ねがうかがわれる意見が散見された。「とても悪かった」は0%であった。

第2問「講師や質問者の声は聞こえましたか」(回答数46)については、「とてもよく聞こえた」(46%)、「よく聞こえた」(41%)が多数を占めた。理由として、「座席と講師の距離が十分に近いため」「マイクを使用しているので聞きとりやすかった」など席の位置やマイクの適切性が挙げられた。「ふつう」(11%)、「よく聞こえなかった」(2%)の理由としても「後ろ



図4 「ザ・プレゼンテーション」開催の様子

の方に座って聞いていたため」など席の位置が挙げられ、少数ではあるが「演者によって変わっていた」「たまに聞きづらい音量の時があった」など演者の声量、マイク性能・設置に起因すると思われる意見もあった。「ほとんど聞こえなかった」は0%であった。

第3問「スクリーンはよく見えましたか」(回答数46)については、「とてもよく見えた」(15%)、「よく見えた」(33%)が多数を占めた。「ふつう」(41%)、「あまり見えなかった」(11%)の理由としては、後方の座席における見づらさが挙げられた。「ほとんど見えなかった」は0%であった。

第4問「講義の内容に集中できましたか」(回答数46)については、「とても集中できた」(15%)、「集中できた」(63%)が多数を占めた。講師の講義技術・講義内容を評価する意見が顕著であった。「ふつう」(22%)の理由としては、オープンスペースで行っていることに起因する理由が挙げられた。「あまり集中できなかった」、「ほとんど集中できなかった」はともに0%であった。

第5問「会場の良かった点は何ですか」(回答数のべ85)では6つの選択肢を用意し、複数回答可とした。回答結果は表2の通り(比率の分母は回答者数の46)。「【理由】」を付した選択肢には、理由欄を設けた。「明るい」、「開放感がある」が過半数を占め、「ふらっと立ち寄れる」は41%を占めた。

第6問「会場の悪かった点は何ですか」(回答数44)においては、第5問と同様に選択肢および理由欄を用意した。回答結果は表3の通り。「周囲の音が気になる」、「周囲の目が気になる」が比較的多かった。「プレゼンテーションを行う場としてふさわしくない」の理由としては、「狭い」「横の席間隔を少し空けてほしい」など設備面に対する意見と、「周りで静かに勉強している人がいるから」「周りの人が集中できなそう」など周囲に気兼ねする意見が挙げられた。「その他」の理由としても、「座席に高低差がないか

ら後ろの方だとスライドが見づらい」「部屋が少し暑い」「席が少ない」など設備への要望が挙げられた。

第7問では、「この会場で授業を行うことについて、ご意見やご感想を聞かしてください」として自由記述欄を設けた。「気軽に立ちよれる」、「履修していない学生でも、ふらっと立ち寄って聴講できる環境はとても良いと思いました」など開放性を評価する記述、「リラックスして参加できる」「落ち着いて話がきける」など居心地の良さを評価する意見があった。一方、「もうすこし広くするとよい」「場所は良いと思うので席がもっと増えると良いと思います」「部屋がいつも暑いです」など、前の設問と同様に設備への期待や要望があったほか、他の設問と同様に場の適性への疑問が挙げられた。

第8問では、各回の授業に関連して、図書館が講師陣の推薦する図書の展示を行ったことについて、「展示図書を利用しましたか」(回答数46)と尋ねた。「借りたことがある」(2%)、「手にとって見た(読んだ)ことがある」(22%)はある程度みられた。しかし、「展示のことは知っていたが利用しなかった」(54%)が過半数を占めた。理由を尋ねると、「本を読むひまがないかも」「興味を持たなかった」など図書に対する関心がないとの回答、および「出席票を出す方向に歩くとそのまま出口に向かってしまい翌週末まで図書館に来ないから」「どの本か忘れたから」など広報・配置改善を示唆する回答があった。「展示のことを知らなかった」は20%、「その他」は2%であった。

第9問では、講義終了後に講義資料(つくばリポジトリ<sup>15)</sup>)と映像(筑波大学オープンコースウェア<sup>16)</sup>)のWeb公開が予定されていることを伝えた上で、「講義資料や動画が公開されたら利用しますか」(回答数46)と尋ねた。「是非利用したい」(26%)、「機会があれば利用したい」(39%)が、多数を占めた。理由としては、「出席できなかった授業があるので」「講師がプレゼンで工夫していたことがプレゼン中のど

表2 会場の良かった点について(複数回答)

回答	人数	比率
明るい	29	63%
開放感がある	25	54%
ふらっと立ち寄れる	19	41%
質問しやすい雰囲気がある	9	20%
緊張感がある	2	4%
プレゼンテーションを行う場としてふさわしい【理由】	1	2%
その他【理由】	0	0%

表3 会場の悪かった点について(複数回答)

回答	人数	比率
周囲の音が気になる	10	22%
周囲の目が気になる	7	15%
プレゼンテーションを行う場としてふさわしくない【理由】	6	13%
落ち着かない	5	12%
声を出しにくい	5	12%
質問しにくい雰囲気がある	4	9%
その他【理由】	7	15%

こに対応していたかなど、講義後の振り返りに利用したいと考えているため「一度では覚えきれないから」などが挙げられた。一方、「利用するかどうかかわからない」(28%)には「プレゼンのノウハウは口頭で説明していたし、スライドの内容は専門的なことが多かったので興味が湧かない」、「絶対利用しない」(4%)には「既に見ているから」という意見があり、「利用しない」は2%であった。

最後に、聴講者のみに対し、「参加しやすかったですか」(回答数 16)、「今日の講義はどのように感じましたか」(回答数のべ 25, 複数回答可)と尋ねた。前者は「とても参加しやすかった」(44%)、「参加しやすかった」(44%)が多数を占め、「ふつう」は13%、「参加しにくかった」「とても参加しにくかった」はともに0%であった。後者は「通りかかったらたまたま」(8%)、「図書館の館内放送」(8%)の当日知ったタイプと、「図書館のメールサービス」(24%)、「ポスター」(24%)、「Twitter/Facebook」(8%)、「図書館の Web サイト」(8%)の事前に知ったタイプにわかれた。「友人のすすめ」、「先生にさそわれた」などを含む「その他」は20%であった。

## 4.2 講師による授業会場への評価

### 4.2.1 調査方法

本科目において登壇した10名に対し、後日質問紙を配付する形で調査を実施した。ただし、うち1名は、希望により、ラーニング・スクエアではなく、閉じられた空間である集会室において授業を実施した。また、うち1名は、TGNが主催するイベント「学生プレゼンバトル」<sup>17)</sup>で最優秀賞を受賞した院生であった。以下に、ラーニング・スクエアで授業を実施した講師による会場への評価を示す。

### 4.2.2 調査結果

「会場の全体的な雰囲気はいかがでしたか」(ラーニング・スクエアにおいて実施した講師のみ)という設問に対しては、「とてもよかった」が1票、「よかった」が7票、「ふつう」が1票、「悪かった」「とても悪かった」はともに0票であり、いずれの回も雰囲気よく授業を実施できたことがうかがえる。

一方、「授業を実施した会場は、授業のやりやすい環境でしたか」(ラーニング・スクエアにおいて実施した講師のみ)に対しては、「とてもやりやすい」が0票、「やりやすい」が3票、「ふつう」が5票、「やりにくい」が1票、「とてもやりにくい」が0票であった。「ふつう」と回答した理由としては、「声を出しづらい」「機材が不十分である」が、「やりにくい」と回答した理由としては「マイクが使い物にならない」

が挙げられた。ラーニング・スクエアには教室とは異なり、大型のスピーカー等がないため、授業内で音源や動画を流す場合は事前に申告が必要であった。また、マイク用スピーカーが1個しかなかったため、声が届きにくい座席があったと考えられる。一方で、図書館内の静かさを保つためにマイクの音量をあまり上げることができないという一面もあった。このように、授業のやりやすさについては今後機材の面で改善の余地があると考えられる。

「会場のよかった点はなんですか」(複数回答可)に対しては、「履修者以外の学生もふらっと立ち寄れる」が7票、「開放感がある」「明るい」が6票、「緊張感がある」が4票、「学生が質問し易い雰囲気がある」が3票、「プレゼンテーションを行う場としてふさわしい」が2票、「その他」が2票であった。その他の意見として、「聴衆との距離が近く感じられる」、「誰でも迷わずに来ることができる」が挙げられた。普段授業を実施している教室とは異なり、教室を仕切る壁やドアがラーニング・スクエアにはないため、開放感があり履修者以外の学生もふらっと立ち寄ることができたと考えられる。また、図書館内の利用者の私語が少なく、静かであったことから、緊張感のある会場という印象を受けたと考えられる。

一方、「会場の悪かった点はなんですか」(複数回答可)に対しては、「声を出しにくい」が3票、「学生が質問しにくい雰囲気がある」「周囲の目が気になる」「落ち着かない」が1票、「その他」が3票であった。その他の意見として「図書館入り口にゲートがあるため、大学関係者以外入りづらい」、「機材が不十分」、「会場設営に人手がいる」が挙げられた。仕切りがないことが開放的な印象を与える一方で、講義内容が受講者以外の図書館利用者の耳にも届くため声が出しにくい、落ち着かない等の意見が目立った。ラーニング・スクエアで授業をおこなう初めての機会であったため、今後ラーニング・スクエアでの授業が増え、講師が図書館内の一角で授業をおこなうという環境に慣れていけば、「声を出しにくい」、「周囲の目が気になる」といった点は改善すると考えられる。

「授業した会場に満足しましたか」に対しては、「満足」が3票、「どちらかといえば満足」が5票、「ふつう」が1票、「どちらかといえば不満」「不満」はともに0票であり、ラーニング・スクエアでの授業に満足という印象を持つ登壇者が多かった。

「授業をする会場の選択肢のひとつとして、この会場を他の教員にも薦めたいと思いますか」に対しては、「薦めたい」が7票、「どちらかといえば薦めたい」が2票、「どちらかといえば薦めたくない」「薦

めたくない」がともに0票であった。このように、授業会場としてのラーニング・スクエアは好評であり、ラーニング・スクエアでの授業利用を希望する教員は今後増えていくことが予想される。

「この会場で授業をすることについてご意見やご感想をお聞かせください」に対しては、「テーブル付きチェアを導入してほしい」や「スクリーンを高くしてほしい」という要望や「雰囲気は良いが授業用に作られたスペースではないため、機材の使い勝手がよいとは言えない」との意見が挙げられた。ラーニング・スクエアでは通常時は授業利用を目的とした机・椅子の配置がされていないため、毎回の会場設営に人手が必要であった。今後、ラーニング・スクエアにおける授業の機会が増える場合、授業利用のための会場設営の頻度が増加することが予想される。そのため、通常時から授業利用時への移行が容易なレイアウトを考案し、設営の労力を少なくすることが望ましい。

以上から、ラーニング・スクエアでの授業には、本来授業に利用されていなかったラーニング・スクエアに適したマイク・スクリーン等の機材を導入したり、授業に移行しやすいように座席配置を工夫したりする等、ラーニング・スクエアを授業のしやすい環境に整備することが必要であると考えられる。

### 4.3 受講者による授業内容への評価

#### 4.3.1 調査方法

授業の各回において、全出席者に対して調査票を配付し、回収した。調査票の設問は表4の通り。

#### 4.3.2 調査結果

Q.1からは出席者の内訳が見えてくる。図5はQ.1-1の回答と、履修者の出席率を示したものである。毎回多くの聴講者が訪れていたことが分かる。Q.1-2とあわせて聴講者（非履修者）の身分を整理すると、各回平均9.9名の学群生と平均1.3名の教職員が出席していたことが分かった。大学院共通科目ではあるものの、研究プレゼンテーションに関心を持つ聴講者が気軽に聴講していた様子が窺える。

Q.2から出席者の満足度を図式化したものが図6である。「とても参考になった」と「まあ参考になった」を合計した数値（「参考になった」と評価した回答の割合）を折れ線グラフで示している。折れ線グラフの推移を見ると、「参考になった」とする回答が大多数を占めていたことがわかる。なおQ.2と絡めて、どのような点が参考になった／ならなかったのかをQ.3で尋ねている。各講師が提示する技法や心構えを、自身の経験と絡めながら評価した記述が多

かった。また、講師のプレゼンテーションを、講師の解説とは異なる観点から批評したコメントも散見された。受講した者が各講義の要諦を反芻していたように思われる。

他にも、本講義の構成や授業会場のあり方等について、Q.4では多様な意見が記されていた。ラーニング・スクエアの活用に関する示唆に富んだ意見も多く、学ぶべき指摘も多かった（考察の節に詳述）。普段接することのない学問を耳にできたという点が刺

表4 調査票の設問

Q.1-1	あなたについて、あてはまるものに☑してください。 □履修者 □聴講者
Q.1-2	あなたについて、あてはまるものに☑してください。 □学群生 □院生 □教職員 □その他 ( )
Q.2	今回の内容は、あなたの研究または学問分野の意義を異分野・一般の人に対して解り易く魅力的に伝えるプレゼンテーションにとって、参考になりましたか。 1:とても参考になった 2:まあ参考になった 3:あまり参考にならなかった 4:全く参考にならなかった
Q.3	Q.2について、どのような点が参考になりましたか。あるいは参考になりませんでしたか。〈自由記述〉
Q.4	ご感想やご要望がございましたら、お聞かせください。〈自由記述〉

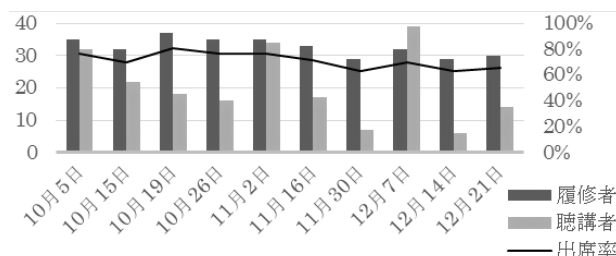


図5 回答者の内訳と出席率

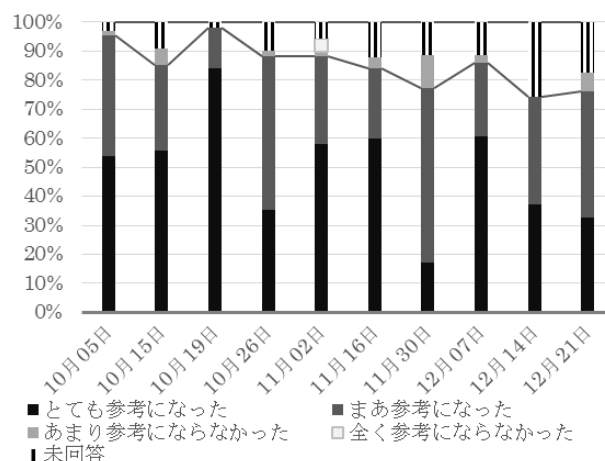


図6 授業の満足度

激的だったようである。総じて、本講義に対する肯定的な意見が大多数を占めていた。

#### 4.4 考察

本科目の実施は、ラーニング・スクエアを主な場所として開講した点で、先駆的な試みであった。本節では、前節で整理したアンケートの結果を基に、授業に対する考察と会場に対する考察を提示する。

##### 4.4.1 会場に対する考察

アンケートの結果から、授業を開催する場としての図書館の有効性や今後の課題が見えてきた。会場としてのラーニング・スクエアは、開放的で立ち寄りやすいという点が評価されている。実際に、聴講した他大学職員からは、「非常に有意義な授業で、ぜひ今後も図書館のオープンスペースで履修者以外も気軽に聴講できるスタイルで継続してほしい」とのコメントがあった。学群生や教職員、さらには近隣の住民等の聴講者も多かったことは、魅力的な内容以外に立地条件が深く関わっていたと考えられる。

一方で、周囲の目や音が気になるため授業への集中の妨げとなってしまったという聴講者や、声を出しづらいという講師がいた。開放性や立ち寄りやすさが少なからず心理的障壁となったことは留意すべきである。

以上をまとめると、ラーニング・スクエアは、活発な議論や発表の場としては、未だ十分に認識されていないことが明らかとなった。諸活動の「見える化」、そしてそれによる知的好奇心の刺激というラーニング・スクエアの設置意図を、より明確に周知するとともに、従来の「静かな」図書館を求める利用者にも「静かな」場所を案内することが必要であろう。また、本科目のような利用機会を重ねることで、ラーニング・スクエアの設置意図が定着することも期待する。

設備面では、予測を大きく超える聴講者数のため、準備した会場スペースの不足、窮屈な椅子の配置に対して意見が寄せられた。パーソナルスペースを考慮した空間利用が求められていることが示唆されている。このような問題が改善されない限り、非履修者の立ち寄りやすさは「履修者なのに席が取れない」といったマイナス要因にもなり得る。実際に受講者へのアンケートには「履修者が確定したら、その数は前の方に座席を確保してもいいのかなと思います」との意見が挙げられた。後方の席では音が聞きづらい、スクリーンが見えづらい等の意見も多く見られ、講師からも機材・設備の更新という要望があった。今後は、人数の多寡や利用形態に対応する柔軟性を

備えることが必須である。開催側にとっても、より容易に会場設営ができるよう、機材の設置場所、座席の配置のパターン化等への工夫が必要である。

「ザ・プレゼンテーション」は、1回のみ既述の集会室で開催された。この会場に対して、受講者からは「今回のホールが場所としてすごく良い」「図書館よりスライドが見やすい」「音響がよくて声がきこえやすい」「今後の講義は全て、集会室で行ってほしい」などの感想も寄せられた。その授業の性質・状況に応じて適切な使い分けも視野に入れながらラーニング・スクエアの利用を進めて行くべきであろう。

閲覧室を転用したラーニング・スクエアにおいては、音響、空調等の整備が難しい部分もあるが、挙げられた意見を元に改善できる部分は少なくない。利用者へは、一般のセミナー室との違いや使い分けについて十分な説明も行っていくべきであろう。

今回の試みで、ラーニング・スクエアの立ち寄り易さ、開放性等が評価され、聴講者の数からもその効果が実証された。また、講師からも、会場に満足し、会場を他の教員にも薦めたいとの回答がほとんどであり、授業会場としては好評だった。一方、快適さ・音響・空調等に課題もあった。受講者の意見を踏まえて改善していくことで、場所の利点を活かしたラーニング・スクエアの利用が進むと考えられる。

##### 4.4.2 授業に対する考察

授業は、具体的にはどのような点で評価されたのだろうか。各回の講義に特殊な要素ではなく、全体を通して散見された観点を抽出する。

まず、講師陣の多様性に関する言及が挙げられる。専門の異なる大学教員が登壇したのみならず、附属図書館の職員や広報室のサイエンスコミュニケーターも本講義に登壇した。各々の講師が想定するシチュエーションは様々で、プレゼンテーションのスタイルも十人十色であった。そのため、「毎回全く異なる立場の方々からご講義を頂ける点が本講義の魅力の1つである」といったように、この点を評価する記述が多数見られた。個性溢れる魅力的なプレゼンテーションを目にする中で、各々の特質に適したプレゼンテーションを模索するようなコメントや、普段触れることのない専門分野を垣間見る楽しみを率直に綴ったコメントも多かった。10通りの巧みなプレゼンテーションを目の当たりにすることそのものが、自らのプレゼンテーションを見つめ直す契機となっていたようである。

とはいえ、各講師の話には通底する部分も幾分見られた。「十人いれば十通り以上の考え方がある中で



全く立場の異なる方が同じ事をオススメしていると、それは必ず自分も参考にしたり、取り入れていきたいと感じました」という好意的な声もある一方、「授業自体の回数が重なる度に、(中略)プレゼンの授業としては、内容がかぶってしまっている為、わくわく感が減ってきてしまった」という声も見受けられた。多忙な講師陣の日程調整は難儀ではあるが、どの回でどのようなプレゼンテーションスキルを強調するか講師間の役割分担をより明確にするといったように、改善の余地も感じられた。

また、本講義の構成についても多くの意見が寄せられていた。本講義では研究プレゼンテーションの実演だけを行うのではなく、各講師には実演における工夫点の解説も依頼していた。この解説に対する評価も高く、「プレゼンの後に、発表方法の種明かしのような時間があつたのが参考になりました」といった感想が初回の授業から相次いでいた。特徴的であったのは芸術系の田中佐代子先生の講義である。受講生のスライドやポスターが一教材とされていた。それらの教材にサイエンスビジュアライゼーションの観点から手を施し、その Before & After を解説したのである。この点は聴講者のアンケートでも高く評価されていた。こうした傾向を見る限り、魅力的なプレゼンテーションの内幕に迫るような解説が求められていたと言えるだろう。たとえば、三輪佳宏先生は、プレゼンテーションの巧みさを「形式知」として捉え直す作業が上達のためには不可避であると述べた。講師ごとに異なる様々な捉え直しのあり方が提示されたことにより、聴講者の評価も高まっていたように思われる。

以上は、本講義全体を通して見られた傾向である。他方、各回に特殊なコメントからも学ぶべき点は多かった。例えば、スライドを用いない哲学のプレゼンテーションは、プレゼンテーションのあり方を根底から問い返す契機となったと高く評価されていた。また、院生によるプレゼンテーションには、同世代の講義を見て競争心を駆り立てられたこと等が感想として記されていた。

総じて言えば、多様な講師陣が研究プレゼンテーションの実演および解説を行う構成は概ね評価されていた。他にも、多様な専門分野から異なるプレゼンテーションスタイルを採る講師陣を揃えること、そして聴講者と立場の近い大学院生に講師を依頼すること等が有用であると思われる。

## 5. 今後の課題と展望

### 5.1 学習支援環境の整備と拡張

「ザ・プレゼンテーション」がラーニング・コモ

ンズを授業に活用することの効果を示したことを受けて、2016年、附属図書館では、一層の利用促進を図るため、ラーニング・スクエアの拡張を行った。

拡張に際して最も留意したのはゾーニングと動線との関係である。通常の閲覧フロアとして設計された個人閲覧席等の空間とラーニング・スクエアの間に仕切りがないことから、グループ学習スペースでは特に音について当初から懸念が持たれていた。「ザ・プレゼンテーション」の実施に際しては周りの利用者からの苦情はなかったものの、アンケートでは学生と教員の双方から、他の利用者に対する遠慮や戸惑いが見られた。これらを解消するため、拡張に際しては個人閲覧席やパソコン利用席とグループ学習スペースとの間に空間を設け、動線を確保するとともに音の緩衝地帯とした。

一方、個人閲覧席やパソコン利用席に向かう利用者の通り道のすぐ脇で授業や講習会を行うことで、新たな学びとの偶発的な出会いも期待される。また、隣接する新館のスタディスペースを従来通り静寂空間とすることで本館のラーニング・スクエアと区別し、ざわめきや刺激を感じながら利用したい人には本館を、静かに利用したい人には新館を案内する。こうしたゾーニングの利用者への周知と定着は引き続きの課題である。

新年度には、グループ学習スペースを「チャットフレーム」と名づけ、会話ができる空間であることを明示した。さらに、イベント・授業実施の申込様式を附属図書館ウェブサイトに掲載した<sup>18)</sup>。これにより、全学の教員に授業や講習会の実施の機会を拡げ、あわせて学生による学習や知的交流を目的としたイベントの実施も呼び込めると考えた。ラーニング・スクエアがより恒常的に、「行けば何かやっている空間」として利用者に着用することが期待される。

### 5.2 積極的な協働による学習支援体制の強化

2.1で述べたとおり、ラーニング・コモンスの活用には教員や他部局との連携が不可欠である。今回の「ザ・プレゼンテーション」は学生、教員、附属図書館がそれぞれの強みとなるリソースを持ち寄り、連携することで成功を納めたという点で、大学におけるラーニング・コモンスの活用の好事例として意義がある。

実施に至るまでには、様々な条件が重なった。第一に、本企画を発案した大学院生が以前から附属図書館にLAとして所属しており、多様な企画を持ち込んでいたことによって、附属図書館側がTGNの活動に対して理解を深めていたこと。第二に、ラーニング・スクエアの活用には積極的な教員が、TGNの発

案を受けて科目を開設していたこと。第三に、ラーニング・スクエアが設置から5年目を控え、設備の拡張と学習支援体制の見直しを附属図書館が検討しようとしている時期に、科目側から附属図書館へ協働の提案があったこと等が挙げられる。人的なつながりは重要である。

中でも、附属図書館が学習支援活動に理解のある教員に1人ずつ声をかけながら協力者を増やしてきたのに対して、大学院生は教えるという立場での教員との密接な関係を活かして、授業を提案し、多様な分野の第一人者を講師として附属図書館に呼び込んだ。大学図書館と他部局との連携の必要性はこれまでも指摘されてきたが、これらの間をつなぐ中心的な役割を大学院生が担ったという点が今回の事例の特色である。

これを筑波大学固有の条件によるものではなく他の大学でも再現可能な事例とするためには、これらの偶然を導き出した要素を抽出する必要がある。大学図書館が、新たな取り組みに関心があり教員に積極的に関わろうとする学生とつながりを持つこと。学生が率先してアイデアを発案できる環境を用意し、大学図書館もサポートをしつつ当事者として関わること。個別の取り組みの成果だけでなく、どの分野にも開かれた場としての大学図書館の強みを、学生を通して教員や他部局に発信していくこと。こうした地道な積み重ねが、今回のような事例の呼び水となったものと考えられる。

### 5.3 活用事例の多様化

今回の事例を受けて、特に多くの分野の教員がラーニング・スクエアで実際に授業を行ったことから、教員同士の横のつながりを通じて、大学図書館を授業に活用する教員が増加し、実施する授業の幅が広がるのが大いに期待される。今回の授業の成功は恰好の先例となり、これまで大学図書館を授業に利用することなど考えてもみなかった教員にも、その意義を認めさせるきっかけとなるだろう。

大学図書館を授業の「場」として活用する教員を増やすためには、こうした先例と効果を示して図書館職員自身が教員組織に働きかけていくことが欠かせない。大学図書館が利用の指針を示しながら、新たな取り組みも忌避せず先例を積み重ねていくことによって、学生や教員がラーニング・コモンズをオープンな授業の場として認識し、活用することに繋がっていくだろう。

### 注・引用文献

- 1) 中央図書館ラーニング・スクエア運営 WG. 3 フォーカス(2012年度の特徴的な活動・事業)1 ラーニング・スクエアの魅力を紹介します! . 筑波大学附属図書館年報 2012. 2013, p.4.
- 2) LAの活動については下記を参照。村尾真由子, 松原悠, 洪昇基, 佐藤良太, 秋山茉莉花, 金瑜眞, 嶋田晋, 金井雅仁, 浜島佑斗. 筑波大学附属図書館ラーニング・アドバイザーの活動. 大学図書館研究. 2014, no.101, p.108-118.
- 3) Beagle, D. R. The Information Commons Handbook. Neal-Shuman, 2006, 247p.
- 4) Bailey, D. R.; Tierney, B. G. Transforming library service through information commons: case studies for the digital age. American Library Association, 2008, 155p.
- 5) 呑海沙織, 溝上智恵子. “大学図書館における学習支援空間の変化—北米の学習図書館からラーニング・コモンズへ—”. 世界のラーニング・コモンズ—大学教育と「学び」の空間モデル—. 樹書房, 2015, p.60-86.
- 6) 例えば下記の事例。矢野恵子. 大学図書館におけるリテラシー教育効果の評価—明治大学「図書館活用法」授業評価を事例として. 図書館の譜: 明治大学図書館紀要. 2014, no.18, p.209-220.
- 7) 横山美佳. 東北大学生のための教育・学習支援—平成 22～23 年度の活動報告—. 東北大学附属図書館調査研究室年報. 2012, no.1, p.47-54.
- 8) 米澤誠. ラーニング・コモンズの大きい可能性: 東北大学での事例をまじえ. IDE: 現代の高等教育. 2013, no.556, p.23-27.
- 9) 中央図書館ラーニング・スクエア運営 WG. 3 フォーカス(2012年度の特徴的な活動・事業)1 ラーニング・スクエアの魅力を紹介します! . 筑波大学附属図書館年報 2012. 2013, p.4-7.
- 10) 筑波大学附属図書館. “成長する図書館—ラーニング・スクエアでできるようになった7つのこと—”. (オンライン), <http://hdl.handle.net/2241/120315>". (第15回図書館総合展ポスターセッション発表資料, 2013-10-29～31日, 横浜), (2016-09-08).
- 11) ライティング支援連続セミナーおよび LA セミナーの各回のテーマ・来場者数については下記を参照。筑波大学附属図書館. “平成 26 年度筑波大学附属図書館業務統計”. 筑波大学附属図書館. (オンライン), <https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/lib/sites/default/file>

- s/attach/statistics-2014rev2.pdf, p.19-20, (2016-09-08).
- 12) 2016年度のシラバスを参照。筑波大学. “ザ・プレゼンテーション”. 筑波大学. (オンライン), [http://www.tsukuba.ac.jp/education/g-courses/detail.php?subject\\_id=890](http://www.tsukuba.ac.jp/education/g-courses/detail.php?subject_id=890), (2016-09-29).
- 13) 善甫啓一, 逸村裕, 野村港二. 大学院生が求め, 立案し, 実現した大学院科目「教員プレゼンバトル」とは. サイエンスコミュニケーション. 2013, vol.2, no.1, p.62-63.
- 14) 筑波大学における, シラバス作成の補助, 講義実施の補助といった, より広い業務内容の実施が認められたティーチング・アシスタントのこと.
- 15) 筑波大学附属図書館が管理する機関リポジトリ. <https://tsukuba.repo.nii.ac.jp/>
- 16) 筑波大学学術情報メディアセンターが管理する, 教育コンテンツを提供するプラットフォーム. <http://ocw.tsukuba.ac.jp/>
- 17) 全学の学生から, 学問・研究プレゼンテーションのNo.1を決めるイベント。石田尚, 善甫啓一, 上道茜, 松原悠, 埴生孝慈, 尾澤岬, 天野千恵, 榎田翼, 佐藤翔, 西浦ミナ子, 赤瀬直子, 三波千穂美, 逸村裕, 山田信博. 筑波大学における「院生プレゼンバトル」の事例報告. 科学技術コミュニケーション. 2012, no.11, p.63-73.
- 18) 筑波大学附属図書館. “チャットフレーム・コミュニケーションルームの利用”. 筑波大学附属図書館. (オンライン), <https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/lib/ja/service/event-space>, (2016-09-08).
- 
- <2017.10.25 受理>
- 1 まつばら ゆう 筑波大学大学院人間総合科学研究科教育基礎学専攻/東京大学大学総合教育研究センター
- 2 さいとう みか 筑波大学学術情報部情報企画課
- 3 いしづ ともゆき 筑波大学学術情報部情報企画課
- 4 おおやま たかとし 筑波大学大学院人文社会科学部国際公共政策専攻
- 5 さとう まみこ 筑波大学学術情報部アカデミックサポート課
- 6 しんむら まみ 筑波大学大学院生命環境科学研究科国際地縁技術開発科学専攻
- 7 のむら こうじ 筑波大学教育イニシアティブ機構